

「……『射精するまで、出られない部屋』？」

（嘘……嘘でしょ！？なんで、どうしてこんなことに……っ。よりによって、隣にいるのが学年のアイドルだった颯真くんなんて……っ！）

真っ白な部屋に響いた無機質な機械音声。モニターに映し出された最悪の脱出条件に、私の心臓は壊れたみたいに跳ね上がった。

気づいたらこの部屋に閉じ込められていて、そして私の他に部屋にいたのは高校の同級生だった颯真くん。クラスは一年、二年と同じで、元クラスメイトだったから必要最低限の会話はしたことがある。けれど颯真くんは成績・運動・ルックスのすべてが上位で、高校全体で人気があった。大学は一流大学に進んだとは聞いていたけれど、まさかこんなことになるなんて。

（ど、どうしょ……！）

そっと見ると、隣に立つ颯真くんは——パニック

になるどころか、いつも通り、困ったように眉を下げて爽やかに笑ったんだ。

「あはは、参ったな。射精するまで出られないか〜。これ、普通に考えたら俺が射精すれば出られるってことだよな？」

「え！ ええっと、そ、そう、かも……」

「だよな。ざっと見たところ扉とかないし。超常現象とかの類かな？」

「そ、そう、だね……」

部屋を確認しながら話す颯真くんに、私は相槌を返すことしかできなかった。

「やっぱ条件達成しないと出られなさそう。けど、ちょっと困ったな。俺、オナニーじゃイけないんだよね……だからさ、協力してくれる？」

「えっ？」

「このままずっとここに閉じ込められたら、お互い困るよね？ だからさ、俺が射精できるよう協力し

てほしいんだよね」

「そ、きょ、協力って……」

「俺とセックスして？ 本当はこういうの、いきなりするものじゃないってわかるけど、出られないんじゃない……ね？」

（セ、セックスって、そ、そんな……！）

真っ直ぐに見てくる颯真くんから目を逸らせないまま私は後ずさった。

「……そんなに怖がらなくても大丈夫だよ。俺、君のこと、前からいいなと思ってたし。……こういう形で伝えるのは不本意だけどさ」

そう言って彼は、私の肩を優しく、でも逃げられないような確かな力強さで抱き寄せた。

「俺のこと、助けてくれる？」

耳元で囁かれる甘い声。いつも通りの爽やかな笑

顔のはずなのに、至近距離で見つめる彼の瞳の奥には、見たこともないような熱い情動が渦巻いている気がした。

「……あ……」

声にならない吐息を漏らした瞬間、彼の唇が私の首筋に吸い寄せられた。ちゅっ♡と、熱い粘膜の感触が肌に刻まれる。

そして有無を言わさぬ動作で私のブラウスのボタンに手をかけた。

「さ、颯真くん……待って……っ、お願い、もう少しだけ……出口探して、みようよ……っ、あ……ッ」
（どうしよう、どうしよう……！ もう壁際まで追い詰められちゃった……！ 逃げ場が、どこにもない……っ！）

「もう充分探したでしょ？ これ以上やったって、きっと同じだよ。……ね？」

後ろに下がろうとした私の手首を、颯真くんがひ

よいっと掴んだ。

（うわっ……！ 男の人の手だ……。すごくがっしりしてて、熱くて……逃げようとしても、びくともしない……っ！）

「で、でも……っ！ ま、まだ、見てない場所が……あるかも……っ」

「んー、隅から隅まで見たと思うけどなあ。

（なんで……っ、なんでそんなに落ち着いてるの！？ 『射精するまで出られない部屋』だよ！？ 普通、もっと焦るんじゃない……。それとも、颯真くんにとっては、私と……その、セックスすることなんて、大したことじゃないの……っ！？）

「も、もしかしたら、何か別の方法が……あるかもしれないし……っ！」

「だったら、ドアにあんなこと書かないんじゃないかな？ ……それとも、俺とセックスするのが、そんなに嫌？」

その声には「拒絶なんてされない自分」を確信し

ているような、有無を言わせない圧があった。颯真くんは困ったように微笑んだ。あくまで優しげな笑みなのに、蛇に睨まれた蛙みたいに体が竦んで動けなくなる。

グッと腰を引き寄せられて、彼の厚い胸板に背中を密着させられる。……完全に、捕まえられちゃった。

「あ……ち、違う……嫌とか、そういうんじゃない……私……っ」

（違う、嫌いなわけじゃないよ……っ！ 颯真くんは学年のアイドルで、みんなの憧れで……。私だって、ずっと遠くから見てたのに……！ でも、こんな形でなんて……心の準備が……っ！）

「そっか、嫌じゃないんだ。……なら、いいんじゃないかな。そんなに難しく考えなくてさ」

颯真くんがふふっ、と余裕たっぷりに笑いながら、颯真くんの手が私のブラウスの上から、お腹をスリ

♡ と撫でてきた。

「ひゃ……っ！？ あ……んう……っ♡」

段々と情欲を煽るような指の動きになり、お腹の奥がきゅん♡ と熱くなって、変な感覚が背中を駆け抜ける。

「あ……っ♡ さ、颯真く……や……やだ……っ♡」
「大丈夫だって。俺、嫌なことするタイプに見える？ ……ほら、笑ってよ。嫌じゃないでしょ？」

スリ♡ スリ♡ と指が動き回って、ブラウスの上から胸の膨らみを、なぞるように舐る。くすぐたくて、恥ずかしくて、頭の芯がぼーっとしてくる。

「んんっ……♡ ちが……そうじゃ、なくて……っ♡」

「ここから出られなきゃ困るよね？ けど俺は一人じゃイけないんだ。なら、しなきゃいけないこと…

…わかるよね？」

（わかってる……わかってるけど……！ 相手はあの、颯真くんなんだよ！？ 私なんかが……っ！）

「諦めて、俺とセックスしよ。……ほら、たっぷり気持ちよくしてあげるから。ね？」

その言葉に、喉がヒクッと鳴った。

怖い。いつもキラキラしてて、誰にでも平等に優しい王子様が、今は私を捕食しようとしている「雄」にしか見えない。恐怖と、それでもどこか期待している自分への羞恥で体が震える中、私は必死で声を絞り出した。

「うう……け、けど……私……っ、は、初めて……なん、です……っ♡」

そう。付き合った経験すらないのに、いきなりこんなの……おかしい。ちゃんと好きな人と、段階を踏んで……そう思ってたのに。

私の必死の訴えを聞いた颯真くんは、一瞬だけ目

を丸くして、それから……。獲物を見つけた猛獣
みたいに、すごく嬉しそうに、目を細めて笑ったんだ。

「へえ……。初めてなんだ。……そっか。俺が、最
初なんだ」

「は、い……っ」

「……そっか。なら、もっと『責任』持って、する
からね♡」

（え……？ なんで、そんなに嬉そうなの……？ 普
通、もっと困ったり、引いたりするんじゃない……。颯
真くんの目が……さっきよりずっとギラギラしてる、
気がする……っ！）

「大丈夫。俺がちゃんと、一生俺のことを忘れられ
なくなるくらい、可愛がってあげるから。……安心
して？♡」

「ひいっ……♡」

彼の瞳が、ドロリとした熱を帯びる。今まで向
けられたことのない、剥き出しの欲情。大人の男の
人の熱にあてられて、体の芯がゾクゾクと震えた。

「や……わ、私……そんな……っ♡ 颯真く、やめ……っんんんんん……ッッ！♡」

喋ってる途中、不意に唇を強引に奪われた。

（え……き、キス……！？ 颯真くんと、キス……っ！？）

目を見開く私を無視して、颯真くんは鼻先を押し付けるように角度を変えて、もっと深く……。強引にこじ開けられた口の中に、彼の熱い舌が侵入してきて、私の全てを塗りつぶし始めた。

「んんん……っ♡ んう……っ、ふっ、ふぐ……っ♡ はっ、やめ……んんんん……♡」

（うそ……っ、舌が……っ！ 私の口の中を、強引に、全部塗りつぶしていく……っ！ 颯真くんの……初めてのキスなのに、こんなに深くて……激しいなんて……っ！！）

ぐちゅり、にちゅ♡と、いやらしい音を立てて、逃げようとする私の舌を絡め取っていく颯真くん。

それだけで頭が真っ白なのに、空いた方の手が私のブラウスを乱暴に押し上げ、おっぱいをムニュリ♡と、指が沈み込むほどの力で鷲掴みにした。

「あぁんっ……♡やめ……あうううう……っ♡」

「……すごい、柔らかい。それに……感度もよさそう。それなのに今まで、誰にも見せないで隠してたんだ？」

耳元で、まるでお天気の世界話でもするような明るいトーンで囁かれる。けれど、私の胸を揉みしだく指先は、お肉の感触を楽しむように執拗で、容赦がない。

「ふう……ッ♡や……やぁ……ッ♡ふっ、ンンン……ッ♡っ、ふうっ♡」

（やだって言いたいのに……っ、唇を塞がれて、甘い声しか出せない……っ！）

抵抗しようとする私の両手は、彼の大きな片手で頭の上に押さえつけられて、指先一つ動かすこともできない。あんなに眩しくて、みんなに平等に優しかったはずの颯真くんに、好き勝手に、おもちゃみたいになされてる。

（うそ……っ、颯真くんの顔、すごく楽しそう……）

目の前の颯真くんは記憶の中の『みんなの憧れ』の笑顔をしているのに、目だけが違う。まるで獲物を追い詰めた猛獣みたいにギラギラしている。それなのにさっきから心臓がドキドキして止まらない。

「ぷはっ♡」

唇が解放された瞬間、情けない呼吸を漏らした。けれど彼は休ませてなんてくれない。颯真くんは私の正面で膝をつくと、スカートをパサリと捲り上げた。